



「モノを作って売るという姿に戻さなければ日本の農業はダメですね」(徳江氏)



「有機栽培の割合を全収穫量の5%にアップすることだって可能です」
(徳江氏)

陥る危険性を孕んでいます。

一方で昨今「スローフード」や「产地消」などが見直されていますが、こうした考え方には、「単品・大規模農業」など似合いません。むしろ小規模な中山間地で作られる特徴的な作物に関心を寄せるはずで、例えばレストランでは、「この人が作った作物」という点をアピールしメニュー化することが、トレンドになりました。つまり、需要は多種多様で中山間地にも生きる世界があるのです。日本の半分はそういう農業です。

「大規模」「小規模」それぞれ存在する意味があり、一つの価値観で全てを語るというのは危険です。

例えば、日本で大規模化を図り、価格面で輸入品と対抗しようとしてもダメなことは一目瞭然です。広大

な農地で地代も遙かに安く、飛行機で種を蒔くような米国や豪州に勝てるわけがありません。しかし品質や

という実態が明らかならば、補助金で支えることは有益で当然のことでしょう。これまでのような「ばら撒き農政」とは明らかに次元が異なることです。

5年後に「3%」も可能だ

近年、農業に興味を抱く若者が確実に増えていることを実感します。しかも新規参入組は口を揃えて「環境保全型」「有機農業」を仰います。

少なくとも「低農薬」は「当然」といつたところでしょうか。「見当たり前のように聞こえるかもしれません」が、これまでの農業を考えると、実は物凄い変化です。「世界に冠たる日本の農業」を公言するならば、やはり「環境にきちんと貢献し、安心・安全で、彩りもよく美味しい農産品」を目指すべきです。

そうなるとやはり「有機」は大事で、せっかく出来た「有機農業推進法」という「基本法」に真摯であるべきでしょう。「基本法」とは、わ

ただし現実の市場経済の枠組みで

は、やはり彼らは脆弱で、生き残れません。むしろ「環境保全への貢献」

という実態が明らかならば、補助金で支えることは有益で当然のことです。

「3%」は彼らより優れているのです。ですから日本の農業は「量」ではなく「質」で臨むべきなのです。

な農地で地代も遙かに安く、飛行機で種を蒔くような米国や豪州に勝てるわけがありません。しかし品質や技術に目をやれば、日本の「細やかさ」は彼らより優れているのです。ですから日本の農業は「量」ではなく「質」で臨むべきなのです。

しかし「有機」の実情を見ると、その受け皿がいまだに十分でない有様で、とにかく本格的かつ総合的な「データ」すらないのです。これではマーケティングなど出来ません。ですから私達は、出来るだけ実践的な所に落とし込めるように、最初の客観的な調査を実施しようと、現在活動しているところなのです。そして調査後は、「オーガニック・マーケティング協議会」を通じて、事業化を目指す人たちをネットワーク化して応援していく、と考えています。

ただし以下の課題は、「うまくデータを扱える人材をいかに集めるか」。これさえクリアすれば、データをどんどん開示できる体制を作り、現在0・18%に過ぎない全農作物に占める「有機」の割合を、5年後に「3%」にまでアップさせることも夢物語ではありません。(談)